

日本性科学学会 ニュース

第21巻第4号

平成14年(2002年)12月

発行人: 野末 源一 印刷所: 樹絢文社

2003年研修会・学会・研究会の開催予告

1. 第32回性治療研修会

日 時 2003年5月18日(日)

場 所 東京都内(未定)

※昼休みに、平成15年度日本性科学学会総会を開催致します。

2. 第23回日本性科学学会

第23回日本性科学学会開催を下記のとおり予定しております。皆様奮って御参加下さいませよう、ご案内申し上げます。

会 期 2003年10月19日(日)

場 所 東京都内(未定)

学会長 原科 孝雄(埼玉医科大学総合医療センター・形成外科 教授)

メインテーマ “性” その多様なもの

一般演題締切 2003年7月25日(金) 18:00

400字以内の演題要旨を下記宛にお送り下さい。

〒350-8550 埼玉県川越市鴨田辻道1981

埼玉医科大学総合医療センター・形成外科

第23回日本性科学学会 事務局 担当: 高松亜子

tel: 049-228-3639 fax: 049-228-3651

e-mail: accol@saitama-med.ac.jp

3. 症例研究会

2003年の症例研究会の予定は次の様になっています。

1月23日(木) 石丸徑一郎先生

3月20日(木) 大谷眞千子先生

5月23日(金) 金子 和子先生

時 間 6:30~8:30pm

場 所 日本性科学学会事務局

Vol. 21

№
4

日本性科学会

〒107-0062 東京都港区南青山1-1-1 新青山ビル西館3F

長谷クリニック内

TEL 03(3475)1780 FAX 03(3475)1789

“こんな気持ちで彼の子を産んでいいのか”

川崎中央福音教会 佐藤 昭雄

B子は、結婚3年になるが夫を信じられなくなっている。相互に会話もあるのにうまくとけあうことがない。どうしたらいいのか…夫婦の日常会話で傷つけあっている姿がみえかくれする。クライアントは自分の心の訴えをしている間に自分の気づきを深めることがあるので、カウンセラーは性、夫婦のことは先ず、聴くことであるような気がする。

1. B子の姿

38歳、既婚、女性、物腰がやわらかく、中学、高校、大学の成績は、上の中ぐらい。彼女の父は、男女のことについてのしつけはきびしく「男女は別々に遊べ」であった。弟がいるが彼は自由奔放な生き方をしうらやましい。B子は消極的で、人前に立ったり、目立つことはよくないと思っていた。自分は窮屈な人間で、親の意見に従うことで精一杯だった。

2. 結婚

見合い結婚、結婚準備講座をすすめられたが、夫と共に結婚生活は人からあれこれ指導されることではない。自然にやっていけるものだ等と言ってお断りした。

夫については、理解力、包容力、積極性、指導性等豊かに感じられたのでうまくやっていけると思い結婚に踏み切った。

3. 夫婦の性意識

夫は婚前交渉は当然で、自分は結婚しても浮気をしない自信はないが、B子を愛しているので一緒にやっていきたい。婚前に幾人かの女性との性交渉はあったとはっきり言い、「浮気」も口にするが、「今はお金が無いから手も足も出ない」と言っている。

B子は処女性を大切にしてきたので婚前交渉等考えてもみなかった。

4. B子の心の傷

B子は、婚前交渉が当然と言う夫にいらだっていた。「処女性を大切にしてきたのに」とB子が言うと、「B子は幼い」と言うだけでなく「処女だったのか」と吐き捨てることばにひどく傷ついた。結婚当初から身体を求められる度ごとに心の傷がうずいた。

又日常会話で「自分に浮気があったらどうする？」と平気で話す夫を許せない。

5. 訴え

B子は夫のことばに腹を立て、夫の求めを断ることが多くなってきた。もともとB子の性の考え方は生殖の性は認められても、快楽の性はとても認められず、夫婦の性生活は義務で応じている。夫の子を産み育てるのも当然の義務と思っているが、果たしてこんな気持ちで夫の子を妊娠、出産、育児できるだろうか、生まれる子に何の影響も無いのだろうか。夫に対する愛情、尊敬もないまま妊娠、出産は恐ろしい。夫との性生活はもちろんのこと、段々と同居することも忌まわしく思うようになっているが、一方B子のどこかに「別居離婚はいけない」との思いもある。夫にもその気はない。B子は迷いつつここに居る。

6. 結果

カウンセラーは、お話を聴くだけだったが、

①一般の夫婦の性生活情報を提供した。

②夫婦の生育の中での「性」の文化背景の違いを指摘した。

面接は数回あったが、B子は自分で以下のようにまとめた。

①夫は正直な人である。

②浮気、不倫等を軽々しく口にする夫であるが、浮気、不倫の事実はない。

③妊娠、出産、育児は未経験なので不安はあるが、遭遇していることをしっかり受けとめ、二人でゆっくり話しをするようにする。

④私は、夫に対し要求することが多い。自分を変えないで夫の欠点、短所をあげき出しても進歩がない。自分から「愛している」「好き」と言わない。愛され大切にされることよりも先ず、彼を愛していくようにしたら何が起きるか、言わずに知れたことである。自分を変えることはやさしくないがやってみたいと思う。

7. 考察

カウンセラーは、教えたくなったり、アドバイスしたくなってしまうが、その時、その場で自分の中に起きていることを返すことも効果はあると思う。又黙って聴いてB子が心の整理をしていくのを待つ、助けるのであって、特に「夫婦」「性」に関することは、教えたりアドバイスしてしまうと、クライアントは次の言葉を失う恐れがある。クライアントは自分のことを話さないで、カウンセラーからいいお話を聞かせてもらって「お話ありがとうございました。沢山のアドバイスも…」で終わってしまうのではないだろうか。

自戒あるのみ。

第7回アジア性科学学会報告

東京大学大学院 石丸 径一郎

2002年11月14日から17日まで、シンガポールのラッフルズシティ国際会議場にて、7th Asian Congress of Sexologyが開催された。公式発表によれば、42カ国から約400名が参加とのことであった。

開会式では、開催母体であるAFS（アジア性科学連合）のPresident松本清一先生に代わり、Vice-presidentである波多野義郎先生のご挨拶をいただいた。その後、民俗風ダンス・バレエなど数種のパフォーマンスが披露され、多民族国家シンガポールを感じさせた。

Celebrating 30 years in ED research というテーマの下、勃起障害関係（特にVardenafilという新薬）の報告が充実していた。また性教育のセッションもいくつかあり、アジア諸国の状況の類似点・相違点が明らかになった。カーマーストラについて詳細な報告をされたインドのKothari先生や、女性の性機能と満足について講演されたアメリカのWhipple先生などが印象に残った。

日本からは、野末源一先生、金子和子先生、高橋都先生が女性のセクシュアリティに関する報告をされた。また、池上千寿子先生の日本のテレビドラマにおける性行動の分析は新鮮だった。針間克己先生は性同一性障害についての報告をされ、石丸は同（両）性愛者の日常体験の調査を報告させていただいた。波多野先生、宮原忍先生、大川玲子先生は学会のcouncilとして、座長の役目を務められた。大川先生と山中京子先生はシンポジストの大役をこなされ、実践経験と各種データに基づく貴重なお話を聴くことができた。

私にとっては初めての国際学会であったが、日本には得られないバラエティーに富んだ刺激を受けた。私も性の健康や性の権利の促進に少しでも貢献できるように頑張りたいと思いを新たにしている体験であった。学際的な学会であるため、専門外の者でも比較的わかりやすい発表が多いので、次回2004年度インド（ボンベイ）の学会には是非多くの方に参加してほしいと願っている。

7th Asian Congress of Sexology に参加して

青山学院大学大学院文学研究科心理学専攻博士前期課程1年 佐々木 掌子

2002年11月14～17日までシンガポールで開催された7th Asian Congress of Sexologyに行きまいりました。学会参加そのものにも経験が浅いので、ここでは一参加者としての素朴な感想を以下に述べさせていただきます。

まずPlenary lecturesでは、Whipple先生による女性の性機能不全の新しい基準についてのお話が印象に残っています。「満足感」というものがICD-10やDSM-IVでは一基準として独立していない、ということに不勉強な私は初めて知ったのですが、満足感という大きく主観に依存する心理状態をいかにして見極めるのかなど、いろいろ思うところがありました。Symposium lecturesでは山中京子先生が、教鞭をとっている大学の授業風景を含めた発表をされました。ここではコンドーム使用を促す性教育のあり方を巡って議論が交わされ、大変興味深かったです。Podium presentationsでは池上千寿子先生が日本のテレビドラマの分析を行っていましたが、ここから性感染症への洞察につなげるとは思いもよらず、かつ納得させられるものがあり大変有意義な時間でした。

2日目の夕食は日本の参加者殆どで高級中華料理の店へ行きましたが、そこでは野末源一先生と宮原忍先生の間に座ることができた上に、あたたかい言葉をかけていただけて有り難かったです。また、波多野義郎先生が場を盛り上げるお話をたくさん提供してくださり、楽しい夕食の時間を過ごせました。食事はどれもこれも大変美味しかったです、特に学会が準備した昼食は選ぶのが困難なほど豪華なビッフェ形式でした。

また学会の空いた時間に、ラッフルズホテルやマーライオンなどの名所を見て回れたのも良い思い出です。

今回のツアーを組んでくださって島崎継男先生の御配慮に感謝します。

初参加の私を皆さんがあたたかく受け入れてくださったこと、興味深かつ有意義な学会発表、美味しい食事、楽しい観光と、非日常的な濃い体験でした。

「膣」か、それとも「膪」なのか？

あべメンタルクリニック 阿部輝夫

小川鼎三著『医学用語の起こり』（1983）に次のように述べられている。

膪（チツ）が女子生殖器の一部として文献上にはじめて登場したのは大槻玄沢の『重訂解体新書』（1826）においてである。この本は玄沢が杉田玄白の命を受けて、『解体新書』（1774）が甚だ不備な訳本なので、『ターヘル・アナトミア』を訳しなおしたものである。

「膪」はラテン語の Vagina, オランダ語の Scheede にあたる玄沢の造語であり、大昔からあった“肉が生じる”という意味の「膪」ではなく、“男茎受容ノ室ナリ、胎産及ビ月経通利ノ道ナリ、音ヲ「シツ」トナス”と。しかし、玄沢の思いどおりに「シツ」にならず「チツ」と呼ばれるようになったのは、大昔からの「膪」がチツかチチと読まれていたためであろう。

一方「膪」は『重訂解体新書』の影響を受けた中国の『篇海』にみられる女子生殖器の一部の用語であり、日本の医学用語としては「膪」ではなく「膪」が正式である。

平成 14 年度資格認定結果報告

認定委員会委員長 阿部輝夫

日本性科学会「セックス・カウンセラー」「セックス・セラピスト」資格認定規定（日本性科学会雑誌に掲載）に基づく資格認定が、実施された2年目の今年度は、4名からの申請があり、「セックス・セラピスト」合格4名という結果となりました。

セックス・セラピスト合格者——茅島江子・森村美奈・大谷真千子・高橋 都

平成 15 年度からは、平成 9, 10 年度に資格を取得されたセックス・カウンセラー、セックス・セラピストの資格更新もはじまります。日本性科学会雑誌掲載の資格認定更新に関する規定を、熟読の上、ご準備をお願いします。

尚、平成 15 年度資格認定ならびに資格更新は、以下の日程で行ないます。

	平成 15 年度資格認定	資 格 更 新
2003. 3		日本性科学会ニュース第 22 巻第 1 号に該当者氏名発表
2003. 6	日本性科学会ニュース第 22 巻第 2 号に資格認定に関する告示	日本性科学会ニュース第 22 巻第 2 号に資格更新に関する告示
2003. 7	申請書類請求者に申請書送付	更新申請書を該当者に送付
2003. 8	申請期間	申請期間
2003. 9 10	審査期間	審査期間
2003. 11	認定結果送付	更新結果送付
2003. 12	認定証送付	更新シール送付